歴史的建物の建築金物について - 5 「和の引手」

薄井　温子

３年前、大原幽学旧宅の襖の引手復元の件で、初めて堀口製作所に伺った。1階にショールームがあり、引手の他、釘隠しや小さなネジ締まりなどが壁やショーケースに飾られていた。

幽学の引手は小判型の単純な形であった。座敷と次の間の境に入れられている襖と、次の間の押入の板襖、台所・土間の板襖に同じ形の引手が使われていた。けれども板襖のものは滑りが悪く、力一杯開閉した拍子に引手が破損したため、工業製品のプレスされた代用品(**写真２左**)がつけられていた。当初と思われる引手と、この後補の引手を比較する（**写真２右**）と、まず重みが違う。見た目でもわかるが明らかに後補のものはプレスしやすい厚みのため、持った時に非常に軽い。当初の引手はずしりと重さがあり、また胴・座と底と呼ばれるところの部分に分かれ、上下に爪のようなもので座をとめている。もちろん現在も既製品で、当初と同じ造り方の引手はあるが、残念ながら大きさがあわず、堀口さんに幽学旧宅の襖の引手の復元をお願いした。

堀口さんは和風金物の錺（かざり）職人で、日本建築に使われる襖引手、手掛、長押の釘隠し、戸締まりなどを作っている。建築における錺金具の始まりは、7世紀頃、仏教建築を装飾するために用いられたといわれている。現在でも社寺建築で見られる扉金具や丁番、擬宝珠金具

写真１　大原幽学旧宅　襖引手（復元）

写真２　左：プレスされた代用品　右：復元引手

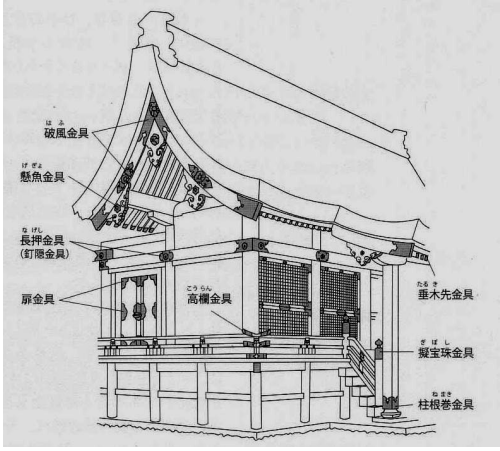

図１　社寺建築に使用される主な錺金具（注１）
『建築　装飾にみる金工技法　錺（かざり）』
竹中大工道具館編より

や高欄金具など、木の保護や実用と装飾を目的に使われている。(**図１参照**)

以前より、堀口さんの所で金工体験が

写真３　中学生の金工体験風景

美術和風金具職人

堀口　宏（昭和15年1月6日生）

堀口氏は、創業者である父の跡を継いだ二代目で、和室金具一般を手がけ、特に引手類を専門として製作している。襖・障子の引手、取手、釘隠し、蝶番などである。屏風金具、茶道具金具なども手がけ、古い金具の修復も行う。製品は寺社・旅館・料亭・茶室・住居などで使用されており、たとえば伊勢神宮・小倉城・根津神社などがある。近年では、岐阜県飛騨市古川町の祭屋台につける見送り絵の金具なども製作している。

平成 10 年度　台東区優秀技能者
平成 15 年度　東京都優秀技能者
平成 19 年度　台東区指定生活文化財

堀口宏さんのプロフィール
連絡先：03-3874-3459

できる事を聞いていた。対象は中高生だが、金工の話を聞くことができ大人でも面白そうだ。この１月やっと念願が叶い、伝技のメンバー数人と中野区の中学生４人に混じり体験をしてきた。（**写真３**）

金工体験「引手をつくる」

＜材料について＞

つくる形や仕上げの色により６種類の材料を使い分ける。

黄銅：真鍮で銅 70％亜鉛 30％の合金
銅に比べ堅いがヤスリをかけ易い

銅：加工しやすいが高価である
黄銅に比べ柔らかいが粘りがある

赤銅：銅に 5％ほどの金が含まれている
黒みのものを作る時に使用

四分一：銅に 1/4（25％）銀が含まれる
ねずみ色になる

洋白：銅とニッケルの合金

銀：特殊な色を出す時に使用

＜製作工程＞

手を掛ける部分の周りを「座」といい、それがついた引手を「座物」と呼ぶ。（**図２参照**）今回体験でつくったのは「座物」の小判型で、座は胴の部分を木槌で叩き縁に折り曲げていく。つまり座・胴と底の２つの部分からなる。幽学の引手と同じ構成だが材料は真鍮ではなく柔らかい銅を使い、寸法も大きい。

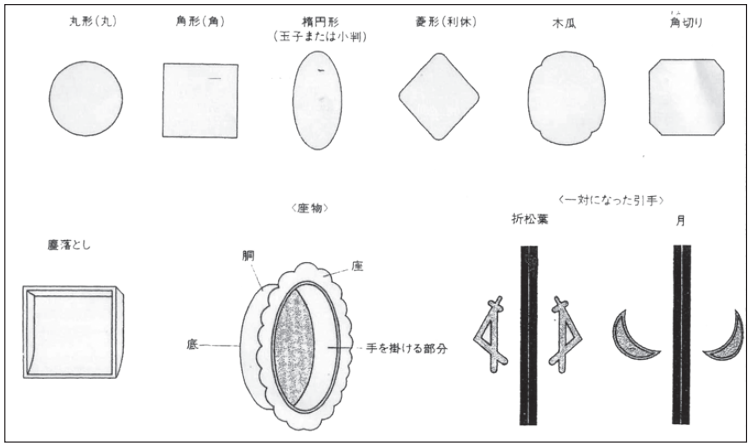

図２　引手の種類
『襖考』東京内装材料協同組合編平成２年 12 月より

(1) 座と胴を型にはめる

引手などは同じものを複数作ることが多いので、鉄製の型がある。その型に既に用意されていた、銅を細く切りロウ付けして輪にした胴と座をはめ、木槌などで叩き成型していく。

(2) 成型 1

型の高さまで胴の上部を木槌で叩きながら縁状の座をつくる。銅は柔らかいのだが、根気よく順番に端から叩かないとムラができてしまう。一定の力で叩き続けることが望ましく、力一杯叩いても形がいびつになる。

(3) 成型 2

型から外しヤスリなどで削り滑らかにするが、体験では堀口さんが形を整えた。

(4) 着色

硫化カリウムの溶剤に入れ , 色を付ける。銅色が黒っぽいグレーに変化する。溶剤は硫黄の臭いがする。着色は緑青の液などにつけることもある。緑青は銅板の表面にできる緑色の錆だが、人工的に作る場合は、銅板に炭酸ガスを吹きつけて作る。最近は臭いが出るので、町中では生産できず、手に入りにくい材料となった。色付が終わると表面にラッカーなどを塗る。用途に応じて着色も様々ある。

(5) 仕上げ

体験では胴・座の部分しか作っていない。底の部分は既に楕円形に切られてあった。これを同じ色に着色する。我々が作った胴の上下を堀口さんがつまむように叩き爪をつくり、爪を曲げて底を取付けると引手が出来上がった。この爪つくりと取付は初心者の我々にはできない。

台東区内には堀口さんの仕事と連携し

写真 4　木槌で叩き成型する

写真 5　堀口さんが形を整える

写真 6　ヤスリをかけて仕上げる

ている職人達がいる。その中の小田彫刻（彫金）と今井（七宝）は、引手の底や座の装飾で、意匠的に必要なときに外注する。合羽橋には、道具で欠かせないヤスリを手作りしている深沢やすり店（ヤスリ）がある。各職人の使い方に合わせて作ってくれる。堀口さんによれば、機械で作られたヤスリに比べ、手に馴染み使い易いそうだ。

また、引手などの大きさに合わせ、銅板や黄銅板の底を切り抜く、プレス加工の水島製作所もある。細かい部分は堀口さん自身が糸鋸で切っていくこともある。

かつての受注は問屋からきていたが、都内で唯一の和金物問屋の清水商店が閉店以後、直接依頼の仕事が増えているそうである。中には住まい手自らがデザインして特注することもある。既製品と違い多少コストはかかるが、思い通りのものが手に入る。また同じデザインで座敷を統一したり、使う所により大きさだけを変えるなど、いろいろと楽しめる。

工房には壁とショーケースの中に襖の引手の他、ネジ締まり錠や屏風の枠飾りなどが展示されている。伝統的な和室だけではなく、新しい空間にも応用できそうである。眺めていると色々なアイデアが浮かび楽しい。

写真 7　爪をつくる

写真 8　引手の爪

写真 9　爪をつくる

写真 10　完成